第２回（仮称）印西市歴史文化施設基本計画策定委員会　会議録

１．日　　時　令和４年 12 月 22 日（木）14:00～16:20

２．場　　所　印西市役所４階　41 会議室

３．出席委員　◎髙橋克委員、〇榎美香委員、西山純子委員、三石宏委員、伊藤哲之委員、西田裕子委員、岸上誠委員、本田正幸委員
（◎委員長、〇副委員長）

４．欠席委員　早川博史委員

５．事務局　生涯学習課　鈴木課長、石川係長、根本主任学芸員

６．支援業務受託者　株式会社丹青社

７．傍聴人　なし

８．会議内容
１ 開 会
２ 会議録署名委員の選出
３ 議事
（１）基本理念の検討
（２）事業活動方針の検討
４ 報告
（１）所蔵資料点数の報告
５ 閉会

９．会議録

１ 開 会

２ 会議録署名委員の選出

一同　：　西山純子委員を選出する。

３ 議事

（１）基本理念の検討

事務局　：　※検討資料について説明

委員　：　基本理念にはサブタイトルが入ってもよいのか。

事務局　：　サブタイトルを付けることも可能である。

委員　：　私は印西市が生まれ育った故郷ではないが、愛着はあるので、「印西への愛着と誇りを高める」という文言がよい。ここで生まれた人でなくても郷土意識に近いものを持つような施設が良いだろうと思う。

（２）事業活動方針の検討

事務局　：　※検討資料について説明

委員　：　「学ぶ」「楽しむ」「輝く」と３つのカテゴリに分かれている、錯綜しているところがある。たとえば、「学ぶ」の考え方のうち２番目と３番目は、博物

館が主体である。これらはそれぞれ「輝く」と「守る」にしてはどうか。

また「輝く」と「楽しむ」は似ているので「楽しむ」にまとめてはどうか。

たとえば、６つの項目のうち、2 番目の＜掘り起こす＞と、3 番目の＜継承する＞という項目は、どちらかというと「守る」ことであると解釈した。そのほかの項目は市民が生涯学習の中で学びながら楽しんでいくので「輝く」に入る。その中でも一番大きな部分は 6 番目の「印西市の歴史・文化を通して、市民が生き生きと活動する機会を創出します」であり、これが最初に来て、「楽しむ」にある 4 番目、5 番目の項目が「輝く」に入ってくる。カテゴリとしては「楽しむ」「輝く」が似ているので、２つにするとよい。「守る」と「楽しむ」の 2 つにすると、右の A～G も入り込んでくると思う。

委員　：　「市民が」という言葉が非常によいと思った。博物館がやるのではなくて、市民が「守る」、市民が「輝く」ために＜学ぶ＞も入ってくるが、主体は市民であり、自分たちが守っていく、そのために博物館ではこういうことをできる、というようにしたほうがよい。

委員　：　事業活動方針なので、博物館が働きかける事柄なのではないか。博物館が市民と一緒に、ということだと思った。今回はどういう博物館にしようかという検討であるので、博物館はこうでなければいけないという方針だと思う。

委員　：　博物館は市民が学ぶところということだと思う。

委員　：　「市民自ら学ぶ機会を創出します。」とあるので、主語が博物館で、市民が自ら学ぶ場をつくると解釈した。

委員　：　「〇市民が」と始まっているが、（１）事業活動方針（案）と「〇市民が」の間に、「博物館が〇〇するために」と一言入れれば、下に「〇市民が」というのが活きてくる。順番の入れ替える必要はあるかもしれないが、せっかくうまく書いてあるので活かしてはどうか。

委員　：　一緒にやっていくのは市民だけではない。博物館には観光資源という側面もあるので、あまり市民を前面に押し出すのもどうだろうかと思う。普通に「学ぶ」「楽しむ」「輝く」でよいのではないか。観光資源とするのであれば、「市民が」の部分は基本理念で入れればよい。いつでもどこでも誰もが学べる、というのが生涯学習の基本なので、その場としての博物館がまず大前提でないといけない。

委員　：　私は小さなまちかど博物館の運営を行っているが、観光協会の理事でもあるので、印西市を外に発信したい、印西市に来てもらいたいと思っているので、「発信する」という文言を入れたい。

委員　：　事業活動の考え方に＜F 情報ハブ＞がある。展示も発信ではあるが、情報ハブとして博物館の情報発信の機能が明確になっているのはよいと思う。

委員　：　事業活動方針（案）には「発信」が抜けてしまっている。

委員　：　「市民が」と内向きだからではないか。

委員　：　「発信」については気がつかなかったが、「学ぶ」「楽しむ」「輝く」というのはよく考えてくれたという気がしている。高齢者で言えば、「博物館は、楽しく学び、いきいきしたシニアライフの実現をお手伝いします」というようなイメージで受け取った。事業活動Ａ～Ｇの博物館の活動が、いきいきシニアライフの実現のために何かしら考慮されているというイメージである。

ただ言われてみると、あくまで市民の中の高齢者に向けた内容であり、外向けの活動には読み取れないと感じた。

委員　：　私は観光会社でもあるので、市民や観光者が通いたくなるミュージアムをどうつくっていくか、が大事であると考える。親子、子ども、高齢者、などいろいろな方が対象になってくるということはよくわかる。もちろん、収集・保存、調査・研究も非常に大事であることはわかるが、結局それを生かすも殺すも、どれだけ来館者に来てもらえるかである。ここは外してほしくない点である。

それと、市内に世界的な大企業の進出が続いているが、その理由の一つは北総台地が丈夫である点にある。もちろん東京都心に大変近いという点もあるが、そういったことも考慮していくと、「地質」という点も今後つくっていくにあたり、１つのポイントになるのではないか。印西市周辺に「地質」を取り上げたミュージアムはないと思う。

委員　：　木下交流の杜歴史資料センターには、はぎ取りの写真の展示である。

委員　：　地質も歴史の大きな流れの１つであり、展示の流れは、ぜひ地質の成り立ちから広げられたらよいと思う。

委員　：　そうすると他の施設との差別化もできるのではないか。利根川はあるが、地質を扱った館は少ない。北総台地に着目して大企業が進出していることもあり、ミュージアムではそういった展示もできるのではないか。

委員　：　歴史展示は旧石器、縄文、弥生ではなく、地質時代から紹介すべきである。

委員　：　ナウマンゾウもいたと聞いた。そういう視点もいるのではないかと思う。

委員　：　先ほどの話の続きで、事業活動方針の主語はどうなるのか。

委員　：　全体の主語は「ミュージアム」が前提なのではないか。その上で、市民が「学べる」、「楽しむ」、「輝く」となるのではないか。

事務局　：　今のお話では、事業活動方針に「市民が」を入れていくと、新しい歴史文化施設が対象としている主体となってターゲットとしている人が市民に限定される感じがする。市外や海外など遠方の方にも歴史文化施設を活用していただきたいのであれば、「市民が」という文言は必要がないのではないか、というご意見という理解でよいか。

事務局　：　「楽しむ」と「輝く」は似た文言であれば 1 つにしてしまい、「守る、継承する」というのも 1 つの事業活動方針の柱として加え、「市民が」を削除して、3 つのカテゴリで考えたほうがより皆さんに使っていただけるような雰囲気が出るのであれば、そのほうがよいのではないか。今のお話を聞いて私もそう思った。

委員　：　前回の委員会では「つなぐ」という言葉も出てきた。「つなぐ」という言葉で守ることも表せるし、継承していく、あるいは外部の方につないで発信していくという両方の意味がある。

事務局　：　基本理念についてもご意見を伺いたい。検討資料で挙げている例は、文言の最後が交流拠点、中核拠点、ミュージアムとなっている。この最後の文言が施設の一番大事にしている部分を示していると思う。「交流拠点」とした場合は交流を主体とした施設のイメージ、「ミュージアム」とした場合は従来の博物館機能を重視している施設のイメージである。いろいろな方に活用していただく交流機能が重視されるのであれば「交流拠点」が良いし、ミュージアムという言葉の中にもいろいろな人が自由に来ていろいろ交流するというイメージが含まれるのであれば「ミュージアム」でも構わない。

委員　：　今まで印西市に点在していたいろいろなモノを、1 つに集約する博物館がほしいと、私の周辺ではずっと切望されてきた。形の上でも点在していた施設が集約されるだろうし、歴史文化の中核になる場所がほしい。歴史文化の中核拠点という言葉が良い。交流拠点、ミュージアム、中核拠点の 3 択で考えたい。

委員　：　この施設ができると、閉館する施設がある。検討資料 P.1 現状と課題で 4 つの施設が挙がっているが、これらが残っているのであれば「中核」という言葉が良いと思う。すべて無くなってしまうのであれば、新しい施設の意味をつくっても構わないと思うが、①資料館は無くなってしまうのか。④印旛医科器械歴史資料館は残るのか伺いたい。

事務局　：　④は残るが、①～③は集約する。

委員　：　現状分散しているから「中核」なわけである。分散していないなら、中核とは言えないのではないか。

事務局　：　西田委員のいう「中核」とは、そこに来れば印西の歴史文化をすべて学ぶことができて、みんながそこに集まってくるようなイメージか。

委員　：　そのとおりである。

委員　：　「歴史文化施設」は仮称で、これから正式名称が付くのだと思うが、頭の中で「ミュージアム」というイメージがある。将来的に正式名称が「〇〇ミュージアム」となるのであれば、基本理念にはあえて「ミュージアム」と入れなくてもよいのではないか。であれば、中核拠点、または交流拠点であると

いう意味付けを基本理念に入れたほうがよい。

委員　：　先ほど「中核」という言葉は矛盾してしまうということだったので、「歴史文化の拠点」という言い方はどうか。高齢者が来たり、子供たちが来たりするので、事業活動の面から言えば「交流拠点」も捨てがたい。

委員　：　基本理念（例）の①と②をミックスする感じか。

事務局　：　前回委員会の事例紹介ではその土地の名前が基本理念の中に出てきていた。先ほど本田委員から郷土への愛着のお話があったが、基本理念の中には「印西」という文言があったほうが良いのかどうか、ご意見をいただきたい。なお、豊田市はひらがなで「とよた」としていて、印西市総合計画では、ひらがなの「いんざい」を使用している。

委員　：　それは漢字とは意味合いが違うのか。

事務局　：　おそらく見た時のイメージで、漢字の「印西」よりひらがなの「いんざい」のほうが柔らかいからだと思う。「とよた」も普通に使っている用語ではなく、少し違った意識をさせるために使っているという気がする。

事務局　：　「印西」は歴史が古く、昔の古文書にも「印西庄」と出てくる。ひらがなにすると普通の地名になるが、漢字の「印西」にすると歴史的なインパクトがあるのかと思う。漢字で表記したほうが歴史的な意味合いに詳しい人が見れば、印旛沼の歴史などをイメージするのかもしれない。

委員　：　「印西市」ではなく、「印西」なのか。

事務局　：　どちらがよいかも含めてご意見をいただきたい。

委員　：　「市」はとって「印西」はあったほうがよい。本田委員のご意見のように、なんなら「郷土印西」と入れてもよいくらいだと思う。ただし、それは市民だけの内向きではなく、外部へも伝えていく文言にする必要がある。

委員　：　「印西」を入れないと、愛着とか誇りとか、なかなか代わりの言葉が見つからなかった。

委員　：　博物館の中では印西の歴史を展示するのであるから。

委員　：　紹介するのは「印西」と限定しておいたほうがよい。

委員　：　印旛村など他の地域と合併して現在の印西市になった。先ほど北総台地という話があったが、たとえば「北総」というのはどうか。印西市には、合併する前の印旛村など、他の地域の歴史もあるので、それを考慮する必要がある。

委員　：　とすると、市域だけではないので、「市」はつけずに、その周辺を含むのがよい。

事務局　：　「印西」だけだと印旛や本埜の方たちには馴染みが薄いようであれば、「印西」の定義の中で、新しくなった印西市全体のことを示すこともできるので

はないか。

委員　：　新しい言葉をどんどんつくってしまうと、その都度定義をしなくてはならないし、いろいろな言葉ができてしまう。

委員　：　「印西」にしてしまうと、旧印西市と捉えてしまう恐れがある。

委員　：　「印西市」とすると、市域以外のもう少し広い範囲を扱えない。

事務局　：　「市」がないほうが、ゆるやかな感じにはなる。

委員　：　過去は同じ村だったのに、印西から出ていった地域もあるので、「印西市」とはしないほうがよい。

委員　：　何がしか、その場所を示す言葉が入ったほうがよい。

委員　：　最終的に「印西」という名前がこの施設名称にも付くのではないか。であれば、基本理念にも「印西」と入れたほうがわかりやすいと単純に思う。

委員　：　館の名前に「印西」がつくか、「印西市」がつくか。印西市立はしかたがないが、そのあとに、ただの「博物館」になるのか、なんとか博物館になって、そこに「印西」が入るのかどうかで、扱っているものが違ってくる。何も入らずに「歴史文化博物館」となるのか。

委員　：　「歴史文化」は入ると思う。

委員　：　基本理念（案）の①をベースに考えてよいか。そこに足したり、引いたりしながら検討する。とりあえず頭に「印西の」を入れる。「印西の歴史・文化と人をつなぐ拠点であり」、もしくは「拠点として」とどちらがよいか。

委員　：　「市民とともに印西の歴史と文化をまもり、未来へつなげる交流拠点」はどうか。どの例も歴史、文化、市民、未来が入っているので、それらをつなぎ合わせてみた。「市民とともに」は入れたいだろうと思う。

委員　：　それは入れないといけない。

委員　：　一番頭に「ふるさとの歴史文化を」としたらどうか。

委員　：　「ふるさと印西の」としてはどうか。

委員　：　あえて新市民の方にも「新しいふるさとです」ということか。

委員　：　「ふるさと」はよい。

委員　：　自分の案を考える時に、「時空を超え、印西の過去に学び、現代に活かし、未来に守り伝える」というサブタイトルを考えた。基本理念は施設の目標とするところ、施設の望ましい状態を表すのだろうと思う。基本理念のメインは、「豊かなまちをつくり、印西への愛着と誇りを高める」であり、学んだり、活かしたり、伝えたりというのは手段のような気がして、サブタイトルにしたほうがよいと思った。その中でも特に、「現代に活かす」を入れたほうがよ

い。たとえば水害の教訓などは、現代に活かしてもらわないといけない。

委員　：　サブタイトルをつけるという意見が出たが、より具体的になるため、あっても構わないと思う。

事務局　：　基本理念（例）①をベースに議論をまとめていき、次回以降皆さんに提示する。今までの話だと、先ほどの西田委員の中核拠点、中心的なものという意味合いは薄れていく。

委員　：　「拠点」という言葉が入っていればよい。

全体に異論はないが、印西ならではのワードがほしい。歴史、文化、つなぐ、未来、市民も、どのようなミュージアムでも基本理念に入りがちだと思う。先ほど、地質、台地というワードが出たが、この印西ならではのワードを１つくらい考えてはいかがか。ここならではのものを加えてはどうか。たとえば、非常に古いところと、非常に新しい、外から来た方が共生している、など。地質でもよいので、何か個性を出せたらよい。それと、博物館の今の流れとしては、体験する、体感することが求められていると思うので、もしできたらそういったところをニュアンスだけでも謳うとよいと思う。

委員　：　岸上委員のご発言のように、印西市の売りは強固な土地である。

委員　：　「北総台地」をどこかに入れるということか。

委員　：　強固な北総台地やチバニアンに匹敵するようなワードを加えてはどうか。

委員　：　印旛沼、手賀沼、利根川という川と沼、湖に育まれた土地で、それで木下が繁栄した。「水に育まれた」「川と沼に育まれた」という文言を入れてもよい。

委員　：　歴史民俗資料館には印旛沼の漁具などが展示してある。それはそのまま移行すると展示することになるのだろうから、印旛沼に関係したことも展示の中に入らないといけない。

委員　：　当然入ると思う。ただ、現在の印旛の市民の方々と川とのつながりがどの程度あるのか。

事務局　：　１つの風景でしかないのではないか。利根川には堤防ができ、良く見えない。手賀沼も我孫子まで行かないと実際には見えない。印旛沼は甚兵衛大橋まで行けばなんとか見える。印旛村の台地の上から印旛沼は見えるが、埋め立てをしているので距離的に遠い。

委員　：　観光協会では「水の郷いんざい」と銘打って、船を出しているが少し弱い。

委員　：　印西ならではの部分については、これからもっと細かく展示の検討を進める中で抽出されるかもしれない。

委員　：　街道があって、水運があって、今はいろいろな会社が入ってきているということなので、たとえば「太古から現在までの人と物の交流拠点」というイメ

ージがある。先端企業だと、物流だけではないと思うが。

委員　：　具体的な要素を入れ過ぎてしまうと、展示コンセプトや展示するモノが限定されすぎてしまう。できるだけ縛られずに、ほわっとした表現がよいのではないか。

事務局　：　先ほどの「北総台地」も、そこから一歩出るとみんな低地である。特に本埜はほとんどが低地であるため、事務局としてはあまり強調しないほうがよいと考える。人と物流という点では、場所は多少異なるが、昔は木下、現在は千葉ニュータウン中央の物流基地があるので、そこは面白いと思う。

委員　：　しかし、高橋委員長のご発言のように物流に限ってしまうと、物流だけの展示となってしまうのではないか。

委員　：　物流というテーマでは展示というよりも、エントランスに市の概要として、簡単なジオラマで紹介することになるのではないか。

事務局　：　そういった印西の特徴も含めて交流拠点であり、交流拠点で基本理念をまとめてもよいのかと思う。

委員　：　一番古い古文書類に出てくる国の名前は「印波（いには）」か。

事務局　：　万葉集にある防人の歌である。常陸国風土記には印旛の鳥見の丘が出てくる。

委員　：　印波の国の印章か何か出土品が出ていないか。文献上は印旛のほうが古く、古墳時代に遡る。印西は印西庄だった。

事務局　：　印西条から印西庄になった。金沢文庫の文書で、印西は出てくる。

委員　：　そのくらいの時代からずっと続いている印西というのもよいのではないか。地域色については、次回持ち越しとする。

事務局　：　今までの話をまとめる。基本理念（案）①をベースに、文言を修正し、「印西の」を付け加えてつくり、諮らせていただく。次回第３回策定委員会でもう一度考えていただきたい。事業活動方針も、カテゴリ３つになると思うが、文言を考えながら整理をする。

委員　：　質問だが、事業活動の考え方で、「A であい・交流」と「F 情報ハブ」があるが、これはこの先、具体的な細目を検討するのか。

事務局　：　そうである。第１回目の資料にあるように、次年度以降、個別の機能等について検討いただく。今年度はあくまでも基本理念と事業活動方針である。各事業活動の細かい内容については、令和５年度の策定委員会で皆さんにご相談したい。

委員　：　「であい・交流」という事業を、この施設の事業として項目立てするのか。

委員　：　これは項目として起こしてもらったほうがよい。一般的に博物館は「であい・

交流」は機能としては入れていないのが普通である。この館の特徴になるので、これは載せたほうがよい。

委員　：　事業活動方針の検討は具体性がないので、よくわからない。たとえば、市民が「輝く」の項目に、これはいったい何をやるのか、「市民と一緒に研究します」「調査・研究を市民と一緒にします」といったことを入れてもよいのではないか。市民学芸員をやっている袖ヶ浦市などでは、市民も有志が集まってきて、市民学芸員の研修をし、その人たちが企画展などの補助をしている。そういう活動をこの新しい館でもやれれば、市民を巻き込んでいける。ここではなく、C 調査・研究のところでも構わないが、入れてほしい。

調査・研究を行うのは、博物館の学芸員だけと限定しないで、多くの館では博物館の基本理念に関わる研究をしている人たちを客員研究員として登録するなり、招くなりして、研究成果を発表してもらうなどしている。そうした取組ができるとよい。これはもっと先に進んだ来年度の話だと思うが、調査・研究は学芸員だけでなく、市民との共同研究も考えていくという方針を入れてもらえるとよい。

D 展示・公開について、博物館は企画展示を大抵はするので、設計時に企画展示室を別途つくってもらわないといけない。その時の要件が 1 つある。重要文化財を展示できるという条件を入れてほしい。重要文化財は取り扱いがなかなか難しく、文化庁の許可が得にくい。空気や、コンクリートの乾き具合などの条件があり、いろいろな機関に調べてもらわないといけない。工事完了後すぐには公開できず、1～2 年かかるので、開館と同時にできるように、少し前に公開許可申請を取る必要がある。

委員　：　公開承認施設を目指した市原歴史博物館が 11 月に開館したが、許可等の関係か開館日が決まらなかったそうだ。

委員　：　許可が下りるまでに時間がかかるらしい。重要文化財が展示できるようにならないと、市外からいろいろな人が来るような展覧会が開催できないということである。それを頭に入れておいてほしい。

また、E 学習・創造支援において、「いつでも気軽に学べる場」として図書室をつくってほしい。博物館法では、博物館には図書室を設置する必要があるとされている。P.3 の利用者像ごとの利用イメージに、今でも歴史民俗資料館で行っている「出前授業」が抜けているので、入れておいたほうがよい。学校団体に来てもらうことだけが書いてあるが、実は「出前授業」を、歴史民俗資料館だけではなく市の施設で行っているので、ぜひ入れてほしい。

また、子供たちが来て、遊べるような場所があるとよい。埼玉県立歴史と民俗の博物館には子供たちが遊べるようなスペース（ゆめ・体験ひろば）がある。土の庭があり、ベーゴマをやったりしていた。ぜひ一度ご覧頂きたい。

委員　：　子供たちの遊び場は、無料ゾーンをイメージしているのか。子育て中のお母

さんたちが幼児を連れて毎日のように通える施設にするには無料でないと難しい。そこまで考えているか。

事務局　：　まだ具体的には考えていない。そういうスペースを設ける場合は、無料ゾーンとして開放できるようなスペースを用意したほうがよいと思われる。

委員　：　いろいろな要望を入れると、非常に大きな施設になるのではないかと心配であるが、それは頭に入れて進めてほしい。

（２）事業活動の考え方のドーナツ型の展開イメージ図で、上が利用のイメージで、下が連携のイメージだと思うが、利用の多様な市民の中に「観光客」が含まれている。先ほど「外部への発信」という意見もあったが、これは閉じた丸の外側に、市域外の人々に対する発信をいうイメージで付け加えたほうがよいのではないか。外部への発信は観光客だけではないと思う。

事業活動方針とは別の話になるが、市原歴史博物館が開館したが、開館の５年以上前に専属の学芸員を採用し、その方が中心となり、文化財行政や市史編纂委員の方々と協働しながら調査を行い、資源や文化財を全部把握した上で、展示をつくりあげていったと伺った。この施設も、ぜひなるべく早い段階で、そういう連携体制の構築を考えていただきたい。先ほど１．歴史文化施設をとりまく課題で、調査・研究の場がなく、体制も整っていないという課題が挙げられていたが、先に整え、そこで活躍できる身分の方、その枠組みをつくったほうがよい。もちろん現在活躍されている学芸員有資格者が何人かいるので、そういう方が中心になって若い人を育て、オープンと同時に、そこへ行けば何でも知っている人がいて、その人たちを中心に市民と一緒につくりあげていくことができる博物館になるとよい。特に、市史編纂室と文化財行政、博物館がバラバラになってしまっている自治体では、うまくいっていないケースがある。印西市はこれから始まるところであるので、一体となり、長年取り組まれた市史編纂の成果が文化財の指定につながり、その指定された宝物を公開できるような施設として博物館が機能するなど、うまく循環し、市民に還元していくとよい。その中で市民を巻き込み、一緒に学び、そこから情報が集まってきて、それがまた還元される、というようなサイクルができるとよい。そのためにも、体制づくりをお願いしたい。

事務局　：　開館してから集めるのではなく、最初に体制を整えて、開館に向かって動き始めるということか。

委員　：　できれば開館時には、育った学芸員の方も含めて一緒に話し合いできる場ができていければよいと思う。

委員　：　学芸員の採用募集は計画的にやっていると思うが、それをもっと明らかにし、内部的に構築するということである。

委員　：　「Ａであい・交流」のところで１つ気になったことがある。来訪者に魅力を発信すると書いてあるが、魅力を感じている方はすでに来ているので、来る

前の方に魅力を発信するという書き方のほうがよいのではないか。来ていただいた方には、さらに魅力を伝えるというイメージが良い。

委員　：　来訪者に発信してもしかたがないが、展示が発信と捉えれば、それはそうかもしれない。「来訪者に」を再検討してほしい。

委員　：　また来たくなる、また行きたくなる博物館、そんなイメージが良いと思う。

委員　：　現在たぶん中核は木下交流の杜歴史資料センターで、こちらは平成 28 年 4 月に開館しているが、実際に開館して、館長が感じていらっしゃることをぜひ新施設にも活かしていただけたらと思う。これから話を進めるにあたり、現状の課題も前もって聞かせていただいたほうが、より良いものができるのではないかと思う。

委員　：　本埜の村役場で発行した資料や収集した資料はいっぱいあったはずだが、どこへ行ってしまっているのか。合併して印西市ができたが、図書館の郷土資料コーナーには、本埜の資料がまったく来ない。本埜と印旛村の資料は支所にあるのか。

事務局　：　本埜村の資料を収蔵してはいるが、公開はされていない。この歴史文化施設ではそうした課題についても対応していきたい。

委員　：　今日の議題ではないが、来館者数について考えていただきたい。検討資料に平成 30 年度のデータが出ているが、もちろん来館者数が最優先ではないにしても、将来つくる施設にあっては、もう 1 桁、2 桁違う数の来館者が見込めるような場所を選び、魅力ある施設にすることが必要である。施設を維持していくにはある程度の来館者を毎年入れることが大事になってくる。市民のアンケートの中では「活気」もキーワードとして出ているので、これは有料の来館者に限らず、全体に関わることである。学芸員の採用も非常に重要なことと思っているが、その一方で、にぎわい、来館者の数も早い段階から考えつつ検討していただけたらと思う。

委員　：　要望や意見で終わってしまったが、事業活動方針もこれらを元に事務局で修正を加えていただくということで、次回持ち越しでよろしいか。

一同　：　了承する。

4　報告

（1）所蔵資料点数の報告

事務局　：　※参考資料 2 について説明

委員　：　この資料全部を、今回の新しい施設に入れるという考えなのか。

事務局　：　医科器械の 1,000 点は除くとしても、基本的には、これらが入ることを理想としている。他のいろいろな機能があるため、入れられるかどうかも含めて、次年度にかけて検討していく。もしどうしても入れられないものがあれば、

また別の場所を考える。基本的には１か所に集約するのが理想である。優先順位をつけて大事なものから入れていく。

委員　　：　歴史資料が「点」となっているが、市史編纂室で集めている箱は 4000 点くらいのものではない。「箱」か。

事務局　：　各館から数字をいただいているが、「点」ではなく衣装ケースのような「箱」かもしれない。

委員　　：　この点数にあるものは全部目録化して、内容の把握はできているのか。

事務局　：　基本的には目録になっている。作業所の民俗資料は一部目録化が漏れているものがある。細かく計数はしているが、多少の変動はある。

委員　　：　データベース化は進んでいるか。

事務局　：　一部データベースになっているものもあるが、全体ではまだ進んでいない。

５　閉会

【会議資料】
・第２回（仮称）印西市歴史文化施設基本計画策定委員会 次第
・検討資料　（仮称）印西市歴史文化施設の基本方針の検討
・参考資料１　印西市の現状と課題
・参考資料２　印西市所蔵資料点数

令和４年度第２回（仮称）印西市歴史文化施設基本計画策定委員会会議録は事実と相違ないことを承認する。

令和５年２月９日

（仮称）印西市歴史文化施設基本計画策定委員会

会議録署名委員　　西　山　純　子